第3章

まちづくりの基本方針

1　目指す将来の姿

（1）将来都市像

共につくる　住み続けたいまち　すかがわ

本市は、これまで、あらゆる人に「選ばれるまち 須賀川市」の実現を目指し、先人たちが英知と情熱を傾け築き上げた大きな遺産である「市民自治の精神」の基に、市民との協働のまちづくりを進めてきており、東日本大震災からの創造的復興においても、市民一丸となって取り組んできました。

また、長い年月をかけ創り上げられてきた魅力的な伝統や文化を受け継ぐとともに、「特撮文化」などの新しい文化も育んでいます。

人口減少が進行している現在においては、住んでいる人が住み続けていくことが重要であり、本市がこれからも選ばれるまちとなるよう、様々な政策に取り組む必要があります。

そのため、誰もが安全で安心に、そして心豊かに暮らすことができる私たちの未来を、まちづくりの主体である市民をはじめ、地域、事業者、行政、そして、本市に関わるすべての人が支えあいながら協働してつくっていきます。

創造的復興の「次の 10 年」という新たなステージにおいて、須賀川への愛着と誇り「シビックプライド」にあふれ、すべての人にとって「住み続けたいまち」であり続けることを目指します。

(2) シビックプライドの醸成

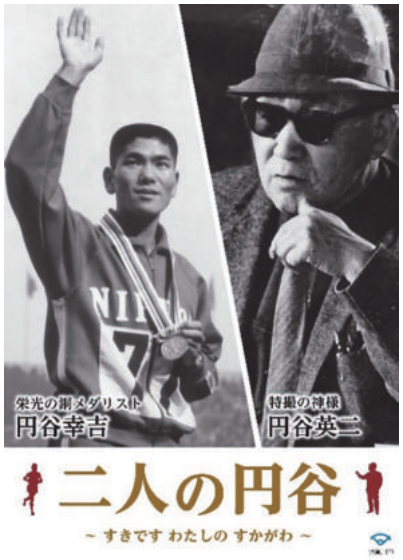
人口減少や少子高齢化が進行している現在においては、持続可能なまちづくりを進めるため、より多くの人が住み続けることや本市を訪れること、関係することが重要です。

そのためには、市民や本市に関わる人が、まちへの誇りや愛着を育み、このまちを構成しているひとりであるという気持ち、いわゆる「シビックプライド」を醸成することで、定住人口の維持や交流人口の増加、関係人口の創出を図り、地域の活性化や一体感を作り出すことが必要です。

本市には、先人たちが脈々と受け継いできた市独自の伝統や文化が数多くあります。歴史ある「松明あかし」や「きうり天王祭」をはじめ、「釈迦堂川花火大会」や「長沼まつり」、「いわせ悠久まつり」などの行事、江戸時代の俳人相楽等躬から連なる俳句文化、さらには、地域の祭りや田植え歌、自奉楽などの伝統芸能も数多く残っています。

これらは、まさに「シビックプライド」を醸成してきた象徴といえます。現在は、本市出身の偉人であり、名誉市民でもある円谷英二監督と円谷幸吉選手を顕彰する「二人の円谷」顕彰事業などを通し、さらなる「シビックプライド」の醸成に取り組んでいます。

市民や本市に関わる人が、それぞれ須賀川の魅力を感じ、その気持ちを共有することにより、誇りや愛着、共感へとつながり、さらなる魅力の創出が図られます。そして、様々な形で関わり合い、一体となってまちづくりを推進していきます。



円谷 英二 氏（つぶらや えいじ）

1901（M34）年7月7日～1970（S45）年1月25日

須賀川市（旧須賀川町）生まれ。操縦士を目指し日本飛行学校に入学した後、神田の電機学校に入学しました。映画界へ入った後は、撮影技術を研究し、「ハワイ・マレー沖海戦」など数々の作品で特殊技術を手掛け、1954（S29）年に公開された特撮映画「ゴジラ」で特殊技術を担当し、1955（S30）年の「ゴジラの逆襲」では「特技監督」を務めました。

1963（S38）年に株式会社円谷特技プロダクション（現・株式会社円谷プロダクション）を設立し、その後も多くの映画で特技監督・監修を務め、手掛けた数々の作品は「特撮文化」の礎となり、「特撮の神様」とも称されています。

円谷 幸吉 氏（つぶらや こうきち）

1940（S15）年5月13日～1968（S43）年1月8日

須賀川市（旧須賀川町）生まれ。須賀川高等学校で陸上競技部に入り、卒業後は陸上自衛隊に入隊し、陸上競技を続けました。その後、自衛隊体育学校の開校と同時に、第一期生として入学する一方、中央大学経済学部にも入学し、陸上競技と勉学に励みながら、数多くの大会で、日本記録や世界記録を塗りかえました。

1964（S39）年の東京オリンピックでは、1万メートルで6位入賞、マラソンで銅メダルを獲得しました。その活躍は今日まで語り継がれ、陸上競技に励む子どもたちの目標となっています。

(3) 策定過程における市民参画

この計画の策定にあたっては、市民ワークショップ、中学生ワークショップ、地域懇談会などを開催し、市民の皆さんや本市に通勤・通学している皆さんとともに本市の将来を考えました。

第 1 回市民ワークショップ（参集型）

【開催日】2021（R3）年 12 月 26 日（日）
【場　所】須賀川市役所 4 階 大会議室
【参加者】28 名（うち、高校生 18 名）
【内　容】

須賀川の「ひと・まち」をテーマに、魅力や地域資源の再発見を通して、すかがわストーリー／マップづくりを行いました。

26、27 ページで紹介している意見のほか、次のような意見もありました。

・若い人の強みを生かして活躍できるように
　KKS 課（高校生課）をつくってほしい
・勉強できる施設や環境が多くなってうれしい
・全世代の交流の場が欲しい
・学生が使いやすい交通手段が少なくて困っている
・選ばれる市って何？ちょっとわからない
・特徴を持つ民間の施設が増えてきた
・本市出身の有名人に情報発信してもらう

中学生ワークショップ（参集型）

【開催日】2021（R3）年 12 月 27 日（月）
【場　所】須賀川市役所 4 階 大会議室
【参加者】19 名（市内各中学校 2 名、当日 1 名欠席）
【内　容】

「10 年後のわたしとこのまち」をテーマに、よい未来、わるい未来のアイデアを意見交換し、中学生の視点から想像する「すかがわ近未来カレンダー」をつくりました。

26、27 ページで紹介している意見のほか、次のような意見もありました。

・須賀川のおいしいお米を広めるために
　おにぎり屋さんをつくりたい
・市役所の職員になって、市民の役に立てたらいい
・植物由来のプラスチックが増えてほしい
・10 年後は空飛ぶ車が飛んでいる
・e スポーツ部をつくってほしい
・本屋さんやパン屋さんが増えてほしい
・緑が減らないでほしい

第 2 回市民ワークショップ（個別型）

【開催日】2022（R4）年 2 月 21 日（月）～3 月 3 日（木）

【場　所】在宅で実施

【参加者】16 名　（第 1 回市民ワークショップ参加者に案内）

【内　容】

当初予定した開催日が、県全域を対象とした新型コロナウイルス感染症まん延防止重点措置期間となったため、参集型でのワークショップを中止し、在宅で実施しました。

参加者が「わたし・わたしたち」、「このまち」をテーマにこれからの須賀川をイメージし、「すかがわ近未来カレンダー」を作成しました。

26、27 ページで紹介している意見のほか、次のような意見もありました。

・帰省で須賀川に帰ってきた時、安心できる場所であってほしい
・須賀川に戻って地域に関わる仕事がしたい
・地域の人とのつながりを大切にしたい
・家族の世話が始まり、行政の支援が頼り
・まちの発展のために働ける仕事に就きたい
・このまちで子育てをしたい
・若者が増えていてほしい

地域懇談会

【開催日、場所、参加者】

2022（R4）年

5 月 24 日（火）	東公民館	15 名
5 月 26 日（木）	西袋公民館	20 名
5 月 30 日（月）	稲田公民館	26 名
5 月 31 日（火）	小塩江公民館	16 名
6 月　2 日（木）	大東公民館	23 名
6 月　6 日（月）	仁井田公民館	19 名
6 月　9 日（木）	長沼保健センター	19 名
6 月 10 日（金）	岩瀬市民サービスセンター	16 名
6 月 13 日（月）	市民交流センターtette	9 名

【内　容】

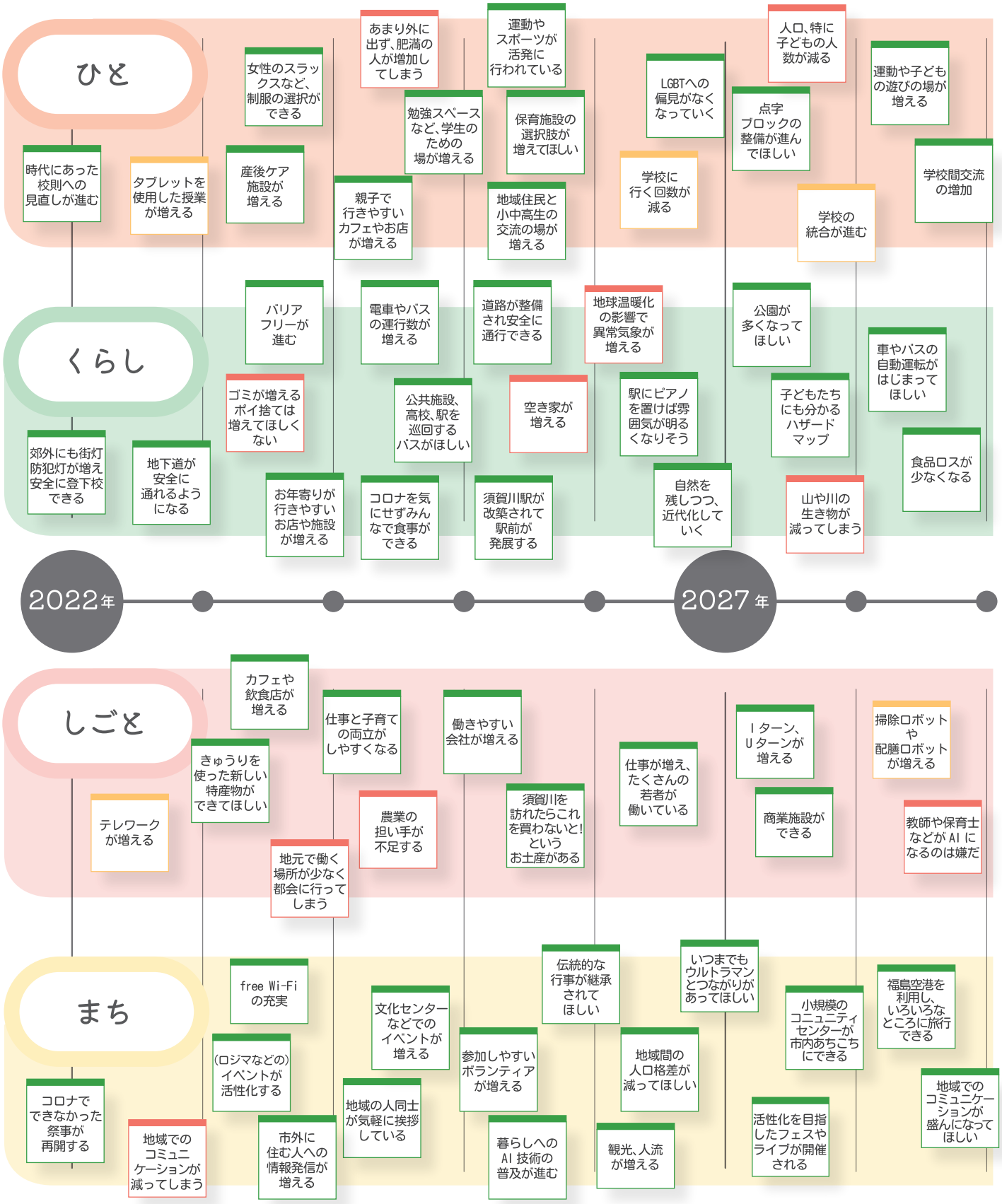
「10 年後の須賀川市の姿、この地域の姿」をテーマに、意見交換をしました。

≪主な意見≫

・地域コミュニティを維持していくために、核になる人材を育て増やしていければよい
・地域の行事に携わり「自分たちでやったんだ」と思うことが、地域への誇りにつながる
・子育てしやすいまちが、人口が増えるまちだと思う
・社会的な状況は変化しており、土地利用の考え方を変えていく必要がある
・地域の人で 10 年後の農業の姿を話し合い、さらに飛躍させ、成功事例を作りたい

市民ワークショップ、中学生ワークショップの意見をまとめた

すかがわ近未来カレンダー「10年後のわたしとこのまち」



第3章

市民ワークショップ、中学生ワークショップでは、「10年後のわたしたちとこのまち」をテーマに、「すかがわストーリー／マップ」や「すかがわ近未来カレンダー」づくりを行いました。

この「すかがわ近未来カレンダー」は、ワークショップで出された数多くの意見やアイデアをまとめたものです。ワークショップに参加いただいた皆さんの意見をご覧ください。

- よい未来
- どちらとも言えない未来
- よくない未来

放課後児童クラブの充実
子育て世代が交流できる場がある
AI を活用した教育が増える
一人暮らしのお年寄りが増える
医療体制がしっかりしている

●子どもたちが学校や地域ですくすく育ち、学べるまち
●他の地域から子育てをするために引っ越したいと思えるまち
●子どもや高齢者、妊婦さん、外国の方など、みんなに優しいまち
●多様性を認め合い、みんなが輝くまち

ドローンによる配達
空き地・空家の利活用が盛んになる
みんなが環境に気をつけている
自然を活かした施設ができる
水害に強いまちづくりが進んでいる
未成年でも便利に使える移動手段がほしい

●住みやすく、離れたくないと思うようなあたたかいまち
●交通環境や駅の機能が充実し、災害にも対応できるまち
●人と自然が共存して暮らせるまち

2032年

須賀川ならではの特産物が増える
シャッター街が増える
須賀川の米がおいしく、有名になる
いいところを残しつつ技術が進歩してほしい
高齢者の増加により、後継者不足が進む
働く時間が短くなり、家族との時間が増える

●地域の魅力がどんどん生み出されるまち
●自分にあった働き方ができるまち
●地域の豊かな食の活用など、須賀川だからできることにあふれるまち

特撮を活用した情報発信が進む
AI と共存していてほしい
観光客が増加する
みんなが SNS で魅力を発信している
子どもたちが地域と関わる機会が増える

●伝統文化や祭り、特産物などが再発掘、継承され、魅力が世界に発信されるまち
●住民同士の関わりが多い、笑顔あふれるまち
●市民が個人のため自分のためではなく、みんなのために手を取り合えるまち
●須賀川市のいいところを残したまま発展するまち

市民ワークショップ、中学生ワークショップで出た意見の一部を掲載しています。

2　分野別基本方針

この計画では、人口減少や少子高齢化対策などの指針である総合戦略の理念を反映し、将来都市像の実現に向け一体的に推進するため、市民生活に関連の深い「ひと」、「くらし」、「しごと」、「まち」の４つの分野を設定します。

これら分野間の連携を図り、相乗効果を高めながら各政策を推進していきます。

分野１　ひと

・子育て環境の充実

幼児教育・保育の充実、子育て支援の充実、妊産婦と子どもの健康管理の充実に努め、安心して子どもを産み育てることができる環境を目指します。

・学校教育の充実

確かな学力の育成、豊かな心と体の育成、新たな学びの環境整備、特別支援教育の充実に努め、変化の大きい社会に的確に対応できる「生きぬく力」の育成に努めます。

・生涯学習・スポーツの推進

生涯学習の推進、スポーツ活動の推進に努め、生涯にわたり、様々な機会・場所で学習やスポーツを行い、豊かな生活を送れる社会づくりに努めます。

・健康で安心して生活できる環境の充実

病気の予防と早期発見・早期治療の推進、フレイル予防・介護予防の推進、地域医療体制の充実、保険制度の適正な運営に努め、心身の健康保持・増進が図られ、健やかに暮らせる環境を目指します。

・ともに支えあう福祉社会の推進

高齢者福祉の推進、障がい者福祉の推進、自立して暮らせる福祉の推進、多様性を認め合う社会の実現に努め、地域において、それぞれの立場で、支えあいながら暮らせるまちを目指します。

分野２　くらし

・防災・減災対策の推進

地域防災体制の充実、災害時の避難・支援体制の充実、治水・浸水・土砂災害対策の推進に努め、防災・減災の取り組みにより市民の生命や財産への被害軽減を図ります。

・安全で安心な生活の推進

防犯対策の推進、交通安全対策の推進、公共交通網の充実に努め、事件や事故に巻き込まれず、安全で安心に日常を送れる社会づくりに努めます。

・生活基盤の充実と循環型社会の形成

住環境の整備・保全、道路環境の整備、水道水の安定供給、環境の保全と循環型社会の形成に努め、快適に生活できる環境づくりを推進します。

分野３　しごと

・雇用の創出と雇用環境の充実

雇用の維持・創出、就労の促進、職場環境づくりの支援に努め、多様な雇用の機会を確保し、就業の促進を図ります。

・農林業の振興

担い手の育成・確保、農林業生産環境の整備・保全、持続的な農業経営の確立、特産農産物の振興に努め、農業所得の安定・向上を図ります。

・商工業の振興

商業の振興、工業の振興に努め、市内商工業事業所の経営力の向上に取り組み、地域経済を活性化します。

分野４　まち

・地域の宝の活用と交流の推進

特撮文化の推進、文化芸術の推進、地域資源を活用した PR の推進、観光振興と交流促進に努め、文化芸術や観光などの地域資源を活用し、交流を図ります。

・市民協働によるまちづくりの推進

地域コミュニティ活動の推進、市民活動の推進、自治会活動の推進に努め、市民の主体的な活動により、人の結びつきを深め、活気のあるまちづくり活動の支援に取り組みます。

・開かれた行政の推進

広報広聴の充実、行政サービスの充実、行政マネジメントの向上に努め、分かりやすい情報と質の高い行政サービスを提供し、開かれた行政経営を行います。

3　政策・施策の体系

	政策	施策
分野1　ひと	1　子育て環境の充実	1 幼児教育・保育の充実 2 子育て支援の充実 3 妊産婦と子どもの健康管理の充実
	2　学校教育の充実	1 確かな学力の育成 2 豊かな心と体の育成 3 新たな学びの環境整備 4 特別支援教育の充実
	3　生涯学習・スポーツの推進	1 生涯学習の推進 2 スポーツ活動の推進
	4　健康で安心して生活できる環境の充実	1 病気の予防と早期発見・早期治療の推進 2 フレイル予防・介護予防の推進 3 地域医療体制の充実 4 保険制度の適正な運営
	5　ともに支えあう福祉社会の推進	1 高齢者福祉の推進 2 障がい者福祉の推進 3 自立して暮らせる福祉の推進 4 多様性を認め合う社会の実現
分野2　くらし	1　防災・減災対策の推進	1 地域防災体制の充実 2 災害時の避難・支援体制の充実 3 治水・浸水・土砂災害対策の推進
	2　安全で安心な生活の推進	1 防犯対策の推進 2 交通安全対策の推進 3 公共交通網の充実
	3　生活基盤の充実と循環型社会の形成	1 住環境の整備・保全 2 道路環境の整備 3 水道水の安定供給 4 環境の保全と循環型社会の形成
分野3　しごと	1　雇用の創出と雇用環境の充実	1 雇用の維持・創出 2 就労の促進 3 職場環境づくりの支援
	2　農林業の振興	1 担い手の育成・確保 2 農林業生産環境の整備・保全 3 持続的な農業経営の確立 4 特産農産物の振興
	3　商工業の振興	1 商業の振興 2 工業の振興
分野4　まち	1　地域の宝の活用と交流の推進	1 特撮文化の推進 2 文化芸術の推進 3 地域資源を活用したPRの推進 4 観光振興と交流促進
	2　市民協働によるまちづくりの推進	1 地域コミュニティ活動の推進 2 市民活動の推進 3 自治会活動の推進
	3　開かれた行政の推進	1 広報広聴の充実 2 行政サービスの充実 3 行政マネジメントの向上

横断的重点ポイント：市民協働、公民連携の推進／シティプロモーションの推進／DXの推進／EBPMの推進

4　計画の推進のために

(1) 横断的重点ポイント

□ 市民協働、公民連携（PPP※1）の推進

すべての人にとって「住み続けたいまち」であるためには、市民、地域、事業者、行政などが情報を共有し、それぞれの役割を尊重しながら計画を推進する必要があります。

これまで築いてきた「市民自治の精神」を受け継ぎながら、東日本大震災で培われた市民力や地域力をさらに育んでいくことが重要であり、自助・共助・公助による協働の理念に基づき、連携を図りながら、地域の課題解決に向けて一体的に取り組みます。

また、社会経済情勢が大きく変化し、市民ニーズが多様化している中、行政サービス水準を維持するためには、限りある行政資源を効果的・効率的に活用し、将来にわたって持続可能な行政経営を継続することが求められます。

そのため、市民との協働に加えて、「須賀川市公民連携（PPP）取組方針」に基づき、民間団体や民間事業者との対等な関係を構築し、対話を促進しながら、民間活力を積極的に活用し、市民サービスの向上を目指します。

□ シティプロモーションの推進

持続可能なまちづくりを進めるためには、現在住んでいる人、立地している企業、訪れる人など、あらゆる人から選ばれ続けることが重要です。

また、本市の魅力を効果的に情報発信することにより、交流人口や関係人口の創出、拡大に繋げていくことも大切です。

本市はこれまで、「二人の円谷」顕彰事業を中心に、市民に対するプロモーションを行うことで「好きです　わたしの　すかがわ」の浸透を図り、シビックプライドの醸成に取り組んできました。

今後は、市民や本市に関わる人が魅力を発信し、より多くの人に伝えることで関係人口を拡大し、定住人口の増加や市の認知度向上につながるよう取り組みを進める必要があります。

市民、地域、事業者、行政などが一体となって、「住み続けたいまち」の実現に向けたシティプロモーションを推進します。

©円谷プロ

シティプロモーションのキャッチフレーズ

「好きです　わたしの　すかがわ」

このメッセージには、まちを思う心だけでなく、まちに関わる一人ひとりが、自分自身を好きになって、自分に自信と誇りをもって欲しいという願いが込められています。

※1 PPP（Public Private Partnership、公民連携）：行政と民間が連携・協働により、最適な公共サービスを提供し、地域の価値や市民満足度の最大化を図る手法の概念の総称

□ DX（デジタル・トランスフォーメーション、デジタル変革）の推進

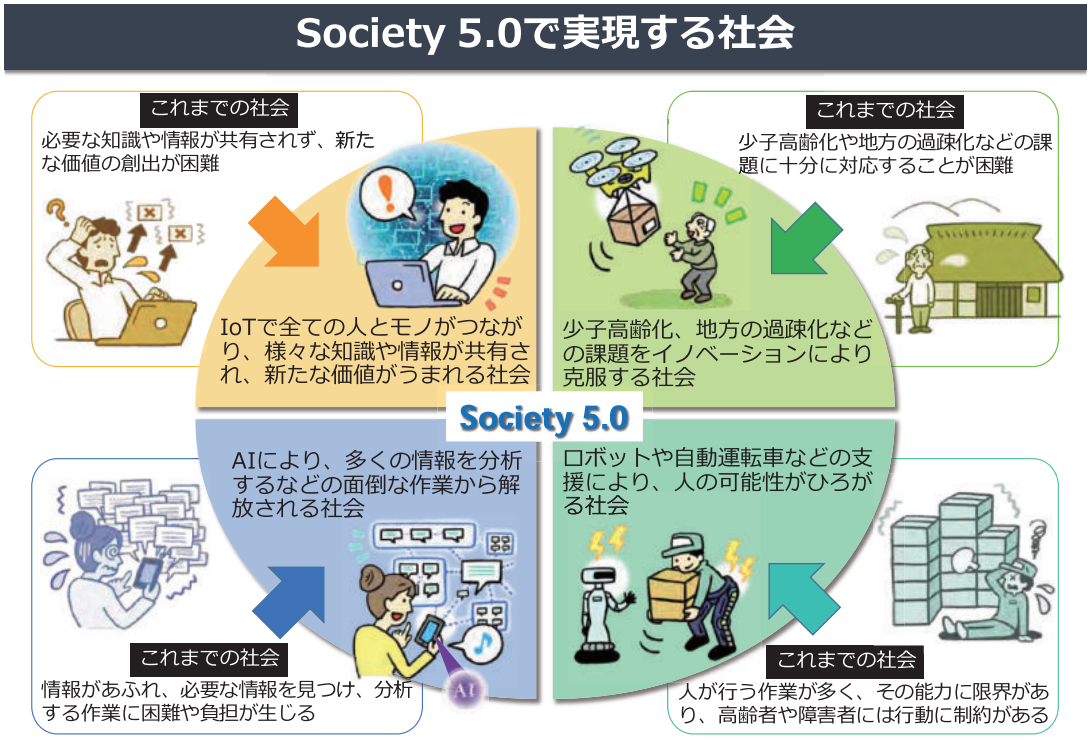
新型コロナウイルス感染症の影響により、テレワークやサテライトオフィス導入などの新しい働き方や教育の ICT 化など、デジタルの活用が加速しました。今後もオンライン診療などの遠隔医療やスマート農業など、各分野において急速にデジタル化が進むものと思われます。

一方、自治体においては、行政手続きのオンライン化の遅れや行政が保有するデータの横断的な活用など、様々な課題も明らかになりました。

国は、「デジタル社会の実現に向けた改革の基本方針（2020（R2）年 12 月）」において、「デジタルの活用により、一人ひとりのニーズに合ったサービスを選ぶことができ、多様な幸せが実現できる社会」を掲げ、「誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化」を進めることとしています。

また、利便性の高い生活を実現し、地域コミュニティの活力を高めることにつながるとして、地域における Society5.0※1の推進を目指しています。

本市では、こうした時代の流れを的確にとらえ、「須賀川市地域情報化計画」との連携を図りながら、すべての市民が様々な形で情報化・デジタル化のメリットを最大限享受できるよう、新しい ICT 技術などを活用しながら、DX を推進します。



出典：内閣府ホームページ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/society5_0.pdf

※1 Society5.0：狩猟社会（Society1.0）、農耕社会（Society2.0）、工業社会（Society3.0）、情報社会（Society4.0）に続く、新たな社会を指すもので、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会

□ EBPM の推進

人口減少や少子高齢化が進行している現在においては、歳入の減少や社会保障費の増大などが見込まれており、自治体の財政状況はより厳しさを増すことが予想されます。

多様化する課題を的確に把握し、限られた資源で効果を最大限に発揮するためには、客観的、科学的なデータに基づく評価を行い、適切な政策立案や改善につなげる必要があります。

本市では、これまでも行政評価に基づいた PDCA サイクルに取り組み、証拠（エビデンス）を活用しながら政策立案を行ってきましたが、今後は、これまで以上に、EBPM（Evidence-based Policy Making、証拠に基づく政策立案）の考え方を重視し、統計データやオープンデータなどを活用しながら、PDCA サイクルを繰り返すことで政策効果を高め、効果的・効率的な行政経営に努めていきます。

プログラミング授業

(2) 重点戦略

国の「デジタル田園都市国家構想基本方針（2022（R4）年 6 月閣議決定）」を踏まえ、デジタルの力を有効に活用して地方創生を推進するための方向性を「重点戦略」と位置付け、4 つの戦略目標を定めます。

戦略目標①　産業力の強化と雇用の創出

人口減少や少子高齢化の進行により、労働力人口の減少や地域経済の縮小が懸念される中、地域を支える産業の振興や起業を促進し、活発な経済活動につなげることが重要であり、デジタル技術の活用を図りつつ、イノベーションを生む多様な人材・知・産業を集め、地域の稼ぐ力を高めることが大切です。

また、デジタルの力を活用して、誰もがやりがいを感じることができる魅力的な仕事や雇用機会を創出し、安心して働き続けることができる環境づくりが重要です。

新型コロナウイルス感染症の影響により、テレワークなどの新たな働き方が定着しつつある中、これら多様化する価値観やライフスタイル・ワークスタイルを踏まえ、公民連携のプラットフォームを活用したマッチング支援、デジタル分野を含めた新規就業の促進などに取り組み、女性、若者、高齢者、障がい者など、誰もが活躍できる就業環境の整備に努めます。

農業においては、認定農業者や新規就農者、集落営農組織、農業生産法人などの多様な担い手の育成・確保、消費者ニーズを的確にとらえた農産物の生産振興や特産物の販売促進、地域特産物のブランド化による市場での競争力強化を図るとともに、生産環境の自動管理や農機の遠隔操作、ドローンや AI の活用など、デジタル技術を使った作業省力化や生産性向上に向けたスマート農業の推進、農業の特性を生かした農商工連携や農福連携など他分野との連携により、農業の持続的発展を図ります。

商工業においては、人材の育成や販路の確保、新技術の開発など、既存企業の経営基盤の強化支援を行い、競争力の向上に努めるとともに、関係機関や地域、事業者などとの連携を図り、起業や出店に対する支援を行います。

また、これらの取り組みをデジタルの側面からもアプローチするとともに、地域の経済を支える中小企業・小規模事業者の DX を推進し、デジタル技術を活用した生産性の向上を図るなど、地域経済の活性化に努めます。

戦略目標②　すかがわの宝を活用した交流の推進

地域の活性化を目指すためには、一定程度以上の人口を地域で維持することが重要です。そのためには、デジタルの力も含めて、地域の魅力のブランド化を進め、須賀川の宝を活用した交流人口の拡大、継続的に多様な形で関わる関係人口の創出に取り組み、本

市への人の流れをつくることが重要であり、転職なき移住、二地域居住など、様々な形での本市への移住・定住を促進することが求められます。

国指定名勝「須賀川の牡丹園」や「松明あかし」などの観光資源、俳句文化など地域に根付く伝統・文化、「円谷幸吉メモリアルマラソン」や「M78 星雲 光の国」との姉妹都市、さらには福島空港など、本市が有する様々な地域資源を最大限に生かし、地域の活性化と魅力向上を図るとともに、企業などによるワーケーションの促進、何度も地域を訪れ地域住民との交流を図る「第 2 のふるさとづくり」の推進など、デジタル技術を活用しつつ、多様なライフスタイルの実現が可能な環境の充実に努めます。

円谷英二監督が礎を築いた「特撮」は日本が世界に誇る文化であり、これらを継承する取り組みを推進するとともに、円谷幸吉選手の功績を讃えたランナーの聖地化など、スポーツ振興によるイメージアップを進めながら、交流人口や関係人口の創出、拡大に取り組みます。

さらに、交流の間口をデジタルの力により広げることで、オンライン関係人口の増加に努め、実際に本市を訪れ、交流するための裾野の拡大を図ります。

特色ある施設である市民交流センターや風流のはじめ館、須賀川特撮アーカイブセンターなどの魅力発信や文化交流を推進するとともに、デジタルアーカイブやバーチャル展示など、より多くの方に魅力を感じてもらうための取り組みを進めることにより、本市に関心を持つ人の増加につなげ、新しい人の流れの創出に取り組みます。

戦略目標③　安心して産み育てられる環境の充実

少子化の進行の背景には、若い世代での未婚率の増加や晩婚化のほか、就業状況の変化に伴う結婚、出産、子育てに対する経済的負担感や子育てと仕事の両立のしにくさなど、様々な要因が複雑に絡み合っており、安心して子どもを産み育てられる環境を整備することが求められています。

本市は、新婚世帯や 0 歳児養育者への経済支援をはじめ、幼児教育・保育無償化に合わせた市独自の給食費無償化や産科・小児科医療体制の確保、病児保育への対応など、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援体制の充実に努めており、引き続き、高まる保育ニーズへの対応や待機児童の解消などの課題に対しても、解決に向けたさらなる取り組みを進めます。

また、子育てアプリの利用拡大や妊産婦などのニーズに応じた取り組みなどについても、デジタル技術を活用しながら推進します。

次世代を担う子どもたちが、確かな学力や豊かな心と体を育むため、「小中一貫教育」須賀川モデルのさらなる推進を図るとともに、「GIGA スクール構想」に合わせた教職員

の資質・指導力の向上や心の教育推進などに取り組みます。
　また、教育デジタルコンテンツの利活用環境を活用し、教育 DX を通して、教育活動や学校運営などの効果的・効率的な推進を図ります。

　妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援体制の一層の充実を図るとともに、子育て世代の安心感や暮らしやすさにつながるコミュニティづくり、仕事と子育ての両立支援など、デジタル技術を活用しながら、それぞれのライフステージに応じた、安心して子どもを産み育てられる環境整備を図っていきます。

戦略目標④　生き生きと暮らせる魅力的な地域の形成

　住み続けたいまちを形成するためには、都市機能、日常生活サービス機能を維持するとともに、地域資源を最大限に生かし、地域に付加価値を持たせることにより、暮らしやすく、魅力あふれる地域づくりを進めることが重要であり、デジタル技術を有効に活用し、質の高い暮らしができるまちの機能の充実を図る必要があります。

　市民が地域において安全で安心な生活ができるように、地域における防災・減災体制や広域的な地域医療体制、複雑化・複合化した福祉ニーズに対応する重層的支援体制を構築し、地域全体で包括的に支えあう地域共生社会の実現に向けた取り組みを推進するとともに、デジタル技術を活用した防災・減災、国土強靭化、遠隔医療の活用、福祉手続きのデジタル化なども進めながら、安全で安心して暮らせるまちづくりに取り組みます。

　ひとが集い、安心して暮らせるように、地域拠点を中心としたコミュニティの活性化を推進するため、デジタル技術の活用を図りながら、コミュニティバスや自家用有償旅客運送などを含めた地域交通の充実、新たな物流サービスの検討、「小さな拠点※1」づくりなどにも努めます。
　さらに、持続可能な循環型社会、脱炭素社会の形成に向け、自然と共生した持続可能なまちづくりを目指します。

※1 小さな拠点：小学校区など、複数の集落が集まる基礎的な生活圏の中で、分散している様々な生活サービスや地域活動の場などを「合わせ技」でつなぎ、人やモノ、サービスの循環を図ることで、生活を支える新しい地域運営の仕組みをつくろうとする取り組み

(3) 総合計画の進行管理

この計画は、まちづくりの主体である市民や地域、事業者、行政など、本市に関わるすべての人が、まちづくりを自分事としてとらえ、同じ方向に向かって取り組むための指針であり、共に連携しながら、協働して取り組んでいくため、行政評価による進行管理を行います。

□　地域資源や行政資源を効果的・効率的に活用し計画を推進するため、計画（Plan）-実施（Do）-評価（Check）-改善（Action）の PDCA サイクルによる継続的な検証、適切な改善に努めます。

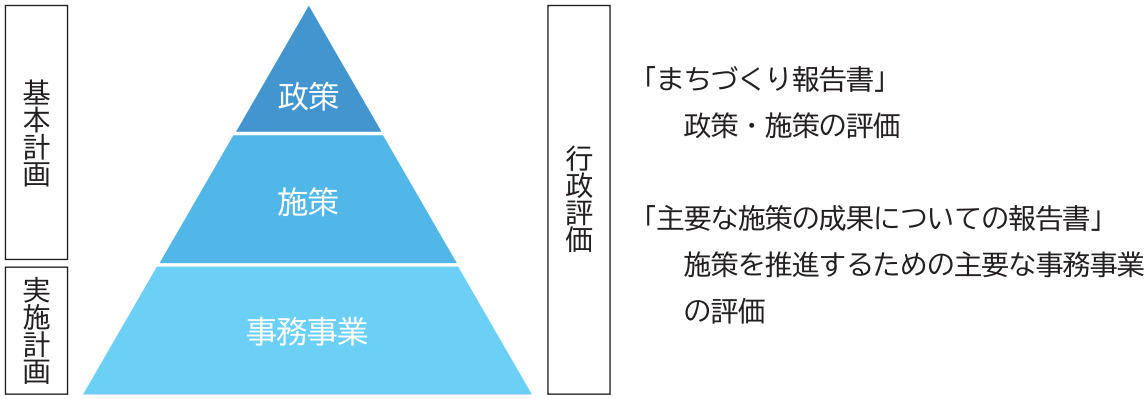
□　限りある行政資源（ヒト・モノ・財源・情報）を効果的・効率的に活用しながら、計画に基づくまちづくりを進めていくため、具体的な指標を設定することにより、成果状況をわかりやすく「見える化」し、まちづくりの進捗度合いを市民と共有します。

□　計画に基づくまちづくりの成果として、目標値の達成度を評価し、まちづくりの取り組み状況を「まちづくり報告書」として公表します。

前年度の政策・施策の成果動向について、評価（Check）を行った結果が「まちづくり報告書」であり、この結果を踏まえて改善（Action）につなげ、計画を推進します。

□　政策の実現に向けて行う事務事業の目的や目標を具体的に示し、実施の指針とするため、毎年度、政策・施策を推進する主な事業で構成する実施計画を作成します。

また、実施計画掲載事業の取り組み状況を「主要な施策の成果についての報告書」として公表します。



コラム
「わたしの 未来 ストーリー 」

このストーリーは、市民ワークショップ、中学生ワークショップで出たアイデアや意見を参考に、市役所の若手職員による庁内ワークショップで作成した「10年後を想像した物語」です。

わたしは県外の出身ですが、大学進学に伴い福島に住んでいます。今年２年生になり、そろそろ進路を見据えてどのような講義を専攻すべきか悩んでいます…。

そんな中、息抜きに友人とフリーペーパーを読んでいると、須賀川市の「農園カフェ」の記事が目に留まりました。若い夫婦が営む、地元の人からも人気のお店のようです。料理もおいしそうだし、すごく行ってみたい！

早速、週末に来てみると、お店のすぐ隣には農地が広がり、店内では野菜や果物の販売もしています。メニューには採れたて野菜や旬の地元食材を使った料理が並び、とっても魅力的。

注文した料理を待っている間、ご主人にお店をはじめたきっかけを聞いてみると、「もともと僕は商科大でマーケティングを勉強していたんだ。でも、農業にも興味があったから、勇気を出して就農してみようと思って。農業っていうと大変なイメージがあると思うけど、今は農業ロボットが作業をしてくれるし、ＡＩを活用して生産管理もできるから、ほかのことに使える時間も増えて、夢だったカフェも開けたんだ。最近は自分が育てた作物をブランド化して全国に販路展開する計画もしているんだよ。」と、嬉しそうに答えてくれました。

そして驚いたことに、ご主人が就農したときに受けたサポートは、わたしの通う大学の研究室が自治体と協力して行っている新規就農者支援だったんです。

ご主人は、「こうした取り組みがきっかけで、子どもたちや農業に関心がある人たちが、『農業は大変』と思わずに、就農を選択肢にしてくれればいいなと思うんだ。」とも教えてくれました。

イメージしていた農業とは全く違うもので、とてもびっくり。大学で勉強しているロボット工学やＡＩ技術がこんなところでも活用されていたなんて…。

店主がキラキラとした目で話す姿を見て、とても充実しているんだなぁと感じましたし、将来はやりがいのある仕事がしたいと思いました。そして、今学んでいる分野が、さまざまな産業の振興につながる可能性があるのだとわくわくしました。

月曜日に、先生に詳しい話を聞きに行こうっと！